

Nature と Lear の認識

山 田 梁

1.

Shakespeare 時代の宗教観、国家観にたつて、*King Lear* に対するすぐれた allegorical approach を試みたのは John F. Danby であった。彼は *King Lear* の中に頻出する 'nature', 'natural', 'unnatural' という語に注目し、その複雑多岐にわたる意味にもかかわらず、'nature' の中に終局的に相容れない意味と思想の対立を考える。*King Lear* におけるこの語の意義と、彼のこの作品に対する態度・方法は次の引用によって明白となろう。

King Lear can be regarded as a play dramatizing the meanings of the single word 'Nature'. When looked at in this way it becomes obvious at once that *King Lear* is a drama of ideas.—¹⁾

一方、Robert B. Heilman は Danby とは全く違った方法、すなわち作品の中に繰りかえしあらわれる image pattern を追求することによって、Danby と殆んど同じ二つの nature 観に到達する²⁾。そして nature pattern が *King Lear* の人間観、宗教観の鍵となっているとする。さらに、Theodore Spencer は Danby と同様中世以来の伝統的人間観、宇宙観と、ルネッサンスと共に芽生えた新思想との争刻の相において、Shakespeare 悲劇を眺めた *Shakespeare and the Nature of Man* の中で、'nature' という語が1601年から1608年の間に書かれた悲劇に多くみられ、しかも *King Lear* の40回がもっとも多く、次いで *Hamlet* の30回であると述べている³⁾。F. E. Halliday また *Macbeth* の key-words の一つとして 'unnatural' に注目する⁴⁾。'nature' あるいはその派生語を無視しては、もはや *King Lear* は、そしておそらくは *Hamlet* も *Macbeth* も解明出来ないかの感を与えるのである。この小論において私は私なりに感じた自然観を通して *King Lear* の中核にふれてみたいと思う。

さて私論をすすめる前に、というのは私の考えは彼らと大いに異なるからで

- 1) *Shakespeare's Doctrine of Nature, A Study of King Lear* (1949), p. 15
- 2) *This Great Stage, Image and Structure in King Lear* (1948), pp. 115 ff.
- 3) *Shakespeare and the Nature of Man* (1958), p. 142
- 4) *Poetry of Shakespeare's Plays*, p. 151

あるが、前記 Danby, Heilman のいう二つの Nature について簡単に言及する。その二つとは言うまでもなく Lear と Edmund によって代表されるものであり、Danby はそれぞれに対し Benignant Nature, Malignant Nature という名称を与えている⁵⁾。前者はキリスト教的にももっとも正統な自然観で神を中心とする整然たる一大体系であり、そこに含まれている一切、つまり自然界、国家、そして microcosm としての人間の在り方と行為を規定する倫理的意義を帯びた自然である。それは神の創造になる自然と国家と個人を貫く一つの秩序としての Nature であり、それに従えば Lear の王国分割も娘達の行為も unnatural といわざるを得ない規範である。簡潔にいえば、the order of nature, や the laws of human nature といった観念である。一方 Edmund の自然観——“Thou, Nature, art my goddess: to thy law / My services are bound”. (I. 2. 1-2)——は、Danby らの概念化を待つまでもなくすでに Bradley も述べているように、既成の秩序を破壊しようとする悪魔的動物的本能であるが⁶⁾、これを思想的にさらに明確にいえば、ルネッサンス期における現実的な Machiavellism, あるいはやがて Hobbes によって体系づけられる ‘every man against every man’ の人間観である。*King Lear* はこの絶対に相容れない二つの自然観の対立によって展開する。

2.

以上が多くの研究者が暗示し、そして Danby によってもっとも明確に解明された *King Lear* の二つの Nature の大要である。しかしながらこの作品から受ける、特に Lear の口にする ‘nature’ という語の与える印象は、そうした伝統的既成的な秩序の観念、あるいは道徳的制肘として把握された倫理的観念としてよりは、むしろもっと素朴な、価値の観念以前の次元において考えられる何ものである。善と悪との区別を越えた、あるいはそれ以前のより広い生命そのもの、実在そのものを意味するものであって、‘nature’ という語自体が第一意義に暗示する、道徳的、宗教的、法律的な善悪の観念を排除した次元にあって捉えられるべきものである。といってもそれは決して倫理的価値を完全に排除しようとするものではない。そこに *King Lear* のもつ、人間存在の根元的問題と人倫の問題との微妙な交錯をみるのだ。事実、Edmund の Nature が倫理的価値を完全に無視しようとするに対し、Lear のそれは遙かに

5) Op. cit., pp. 20 ff.

6) *Shakespearean Tragedy* (St Martin's Lib.), p. 251

そして本能的に価値を志向し希求する。それは劇の進展にともない 'nature' という言葉が次第に影をひそめそれに代って 'justice' という明晰な倫理観念が終末に到って多くあらわれることにかがわれよう。Edmund と Lear においては、人間に自然にそなわっている本能は全く別の方向に働いている、と言えるのであって、始めから Lear を導いたのは決して倫理的規範ではない。Edmund はある意識的な目的をもって本能を正当化しようとするに反し、Lear は無自覚から次第に覚醒への過程において Nature と対決する。そうした素朴な Lear の自然観は、単に Edmund のそれと対立するばかりでなく、つねに自覚的なそれ故に伝統的とも言うる Cordelia, Edgar, Albany そして Kent の自然観ともいちじるしく異なっている。Danby, Heilman が強調し、最後に勝利をおさめると考える Nature は、実はこの Cordelia 達の倫理的、宗教的自然である。私は Lear の、彼らとは違って、すでに与えられたものとしてではない、あるいは規範化されない自然観が、その直接体験を経て如何に変化して行くかを考察したいと思う。

娘達の忘恩に端を発した苦しみに、時に素朴な自然観への動揺と不信を招きながらも、Lear は決して妥協することなく、嵐の場を始めとするもろもろの体験を通して常に何かを手探りで、しかも自分の皮膚で求めようとする。彼は同じく子故に悩む Gloucester のように、自ら死を求めることなく、狂えば狂う程真実を透視する知力と想像力を発揮する強靱な精神の所有者である。両眼をえぐり取られたその直後より Edgar に導かれる Gloucester とは違って、つねに自己の直接経験によってのみ、象徴的に言えば肉体を荒野の嵐と雷雨に曝らすことによって真実を掴もうとする Lear のこの態度に特に私は注目したい。いわば主人公のこの肉体を以てする経験は、Lear をして中世以来の伝統的思想を出来るだけ排除し、既成思想の援けを借りずに何かを求めさせようとする Shakespeare の意図を物語るものではなからうか。さらに Lear の口にする 'nature' の特殊性、倫理以前の次元から出発して次第に規範化にむこう傾向も、作者のこの意図の反映ではないであろうか。その意味において、Lear の Nature の中にキリスト教的思想をみる諸家と意見を異にするのである¹⁾。

1) Cf. K. Muir: *King Lear* (The Arden Shakespeare) Introduction p. iv.

"The play is not, as some of our grandfathers believed, pessimistic and pagan".

劇全体からみる場合と、Lear の自然観のみを考える場合とは、違ってくると思われる。つまり、背景としての世界と Lear の思想とを区別して考えたい。

Geoffrey Bush はキリスト教思想の問題に関して慎重である。(Shakespeare and the Natural Condition, 1956, p. 109.

King Lear が親と子の関係をテーマとし、その破綻を出発点としその再会合一を以て終っているのは決して偶然ではない。既成思想を排除する場合、Nature という何か根元的な暗示的な語とその意味に類すると同様、テーマを人間関係のもっとも根本的なものに求めるのは当然であろう。もろもろの人間関係の中でもっとも自然な結合をもって結ばれている親と子の関係を取りあげることによって、Shakespeare は殆んど絶対的と思われる程の悪と、救済の愛と善の存在あるいはその可能性を証明しようとする。それが義理や恩義、社会的制約をうけることもっとも少い関係であってみれば、そこに幻滅を覚えた Lear の怒りは人間のもっとも根元的な、人間の存在そのものへの怒りであり、Lear を狂気へと追いやるのも不思議ではない。親子の関係は、単に文明化された社会の規範ではなく、倫理の体系を超越したあるいは倫理以前の問題であって、社会、国家の秩序もそれに較べれば二義的な問題となって来る。その破綻は J. I. M. Stewart に従えば 'basic antagonisms within the primary biological unit'²⁾ である。Danby は Lear の王国分割は社会、国家の秩序を犯す行為であって、彼の苦難と国の乱れはその当然の報いである、それは神の意志にそむくものである、という。成程それは Spencer あるいは E. M. W. Tillyard が order または degree の名で呼んでいる Shakespeare 時代の正統的世界観であろう³⁾。だが Lear の苦難と覚醒は、国王という国家社会の秩序大系に含まれる存在としてよりも、むしろ子に対する親という立場においてなされているのである。開幕冒頭における Lear は紛れもなく国王である。Shakespeare の他の作品におけるどの王よりも威信と権威にあふれた国王ではある。しかし娘達に対する Lear は、彼女らの愛の言葉を、本来測りえない愛の深さを言葉で求める他愛もない父である。*King Lear* が単にプロットとして親と子の葛藤をえがいたものであるという表面的な視点からでなく、Shakespeare が人間の実存問題への足掛りとして親と子のテーマをとりあげたのだと考えねばならない。その意味において Geoffrey Bush の次の見解には全く同感である。

Hamlet is important because he is a son, and Lear because he is a father.
Perhaps this natural relation was a particular preoccupation of Shakespeare's
imagination;⁴⁾

2) *Character and Motive in Shakespeare* (1950), p. 25.

3) Spencer (op.cit., pp. 1-22), Tillyard (*The Elizabethan World Picture* 1956. pp. 7-22) とともに *Troilus and Cressida* 中の "degree" に関する Ulysses の言葉 (I. 3. 85-) を引用している。

4) Op. cit., p. 76.

伝統的思想を出来るだけ排除しようとしてこの根元的な人間関係によって人間のぎりぎりの姿を直視しようとした Shakespeare の態度と方法は、いささか唐突であるが、絶対の真理を求めて一切の疑いの限りのものを疑いつくし、最後に疑うことの出来ない「我思う」から出発した Descartes の態度と方法に通じるものがあると思うのである。そして Shakespeare の従って Lear の *cogito ergo sum* は、人倫的意味を含まない親子の自然の情愛を意味する 'nature' であった⁵⁾。

3.

Lear の悲劇は国を三人の娘にその愛情の深さに応じて分ち与えようとしたことに始まる。三分される領土の範囲はすでに Lear の胸中にあったであろう。また娘達に愛の言葉を求めたことは Bradley のいうように単に形式的な自己満足のためであったであろう⁶⁾。

Which of you shall we say doth love us most ?
That we our largest bounty may extend
Where *nature* doth with merit challenge. (I, 1. 51-)

Goneril, Regan の巧みな口先だけの愛の言葉に続いて、悲劇の序曲を奏でる Lear と Cordelia との対話がかかわされる――

Nothing, my lord.

Nothing ?

Nothing.

Nothing will come of nothing : speak again.

Unhappy that I am, I cannot heave
My heart into my mouth : I love your Majesty
According to my *bond* ; no more nor less. (I. 1. 87-)

Cordelia の言葉が Lear にとって冷くかたくなに響いたであろうことは疑いの余地はない。それが姉達の 'glib and oily art' (I. 1. 224) に対する反感と、そんな言葉にだまされる父への抵抗であったかも知れない。それはともかくとして、Lear のせりふの 'nature' と娘の 'bond' に注目しなければならない。

5) Edwin Muir は、*King Lear* の中心テーマは、Lear と娘達の権力への意志の対立と考えている。

cf. "The Politics of *King Lear*" *Essays on Literature and Society*.

1) Op. cit., p. 204.

‘nature’ は明らかに子の親への自然な愛情 (filial affection) を意味し, ‘bond’ は子の親に対する義務 (filial duties) を意味する。ここに自然な情愛と義務, 責任というより意識的規範の対立を私はみる。この論文の性質上, ‘nature’ という語の語義についても考察しなければならない。この ‘nature’ を filial affection とする考えは昔からあるにもかかわらず, K. Muir はあえて親の子によせる愛情 (paternal affection) と解釈し, 同じ行の ‘merit’ を filial affection と考えている²⁾。この Muir の見解は Lear の心境を考えるときわめて不自然なものであり, ‘where nature doth with merit challenge’ の一行を, ‘where natural strength of affection shows its deserts’ と読む Heilman の見解³⁾が Lear の心情を正しく洞察したものと云わねばならない。そして Lear の怒りはそうした自然の情愛を求めたに対し, duties としての ‘bond’ をもって Cordelia が答えたことにあると考えてよからう。その前後の彼女の言葉が Lear に与えた影響を決して無視するわけではないが, ‘bond’ と ‘nature’ のコントラストによって Lear の精神, 意識が明晰に浮彫りにされるのである。さて, Cordelia の態度と言葉の冷たさはしばしば議論の対象となっており, Coleridge はそこに ‘some little faulty admixture of pride’⁴⁾を認め, Bradley は ‘a touch of personal antagonism and of pride’⁵⁾を感じた。この通説的そして妥当な見解に対し Danby は, 19世紀的解釈の烙印をおし, Cordelia の態度は16世紀にあってはもっとも常識的な子の親に対する正しい態度であったと反論する。そして彼女の ‘According to my bond; no more nor less’ を ‘I love you as every normal girl loves her father——naturally!’ と解釈する⁶⁾。Heilman もそうであるが, Danby は一方的に Lear の愚劣さを責め Cordelia の態度を正当化しようとする。彼は Thomas Becon の *The Catechism* の一節を引用して彼女の中にキリスト教的な子供の義務観念の忠実な使徒をみる。次にその引用の一部を引用しよう。

The honour due unto parents is so far to be excuted, as it may stand with the honour of God. If it doth in any point obscure that, then it is utterly to be rejected and cast away. And we may right well and with a good con-

2) Op. cit., p. 6

斎藤勇氏も同じように解釈されている。*King Lear* Edited and Translated by T. Saito (研究社) p. 12.

3) Op. cit., p. 121.

4) *Lectures on Shakespeare* (1900) p. 335.

5) Op. cit., p. 268.

6) Op. cit., p. 129

science say: 'We must obey God rather than men'.

Heilman のように Cordelia の中に秩序と愛を、また Danby のようにキリスト教的精神の権化をみるのは一応認めるとしても、Lear をただ愚劣なりと断定し秩序の破壊者とする考えようとする態度は悲劇に対する正しい見方であろうか。彼らの言う Lear の愚劣さのみで、一体 *King Lear* のもつ悲劇の内的必然性が解決できるであろうか。たとえそれが国王として国家の秩序の破壊を招く愚行であったとしても、人間のそうした愚劣さのみの中に、どうしても避けることの出来ない悲劇の論理の一步があるであろうか。*King Lear* を Morality に接近させ allegory とみる Danby は、Bradley が性格研究に終って symbols あるいは ideas の探求にまで到っていないと批判する⁷⁾。だが彼の allegorical approach は、この 'bond' 解釈において明らかに行き過ぎを招来したと言わねばならない。彼の考えを明らかに参照したと考えられる Robert Speaight また、Cordelia の言葉が感傷的な言葉でなく sacramental terms で表現されていることに注目し次のようにのべている——

The word *bond* has caused the difficulty here. But Shakespeare had too much in him of the passing order, the reciprocal rhythm of rights and duties, to think of Cordelia's *bond* as anything but a service which is perfect freedom. It would never have struck him as constrained; never, still less, as unnatural⁸⁾.

つまり Speaight は Danby の説を認めるばかりでなく、さらに Shakespeare その人が 'bond' という語に感得し附与した意味を推量しているわけである。そして 'bond' は Cordelia にとっても同様 Shakespeare にとっても unnatural なものではなかったであろうという。だが果して Lear にとってはどう響いたであろうか。それは Lear 自身の言葉がもっとも端的に、そして Lear の心情と意識を伝える表現をもって語られているのだ。彼はふたたび 'Nature' を口にする——

a wretch whom Nature is ashamed
Almost t'acknowledge hers.

(I. 1. 212-)

Shakespeare はあるいは 'bond' という語にキリスト教的意味を感得していた

7) Ibid., p. 116.

8) Ibid., p. 59.

9) Nature in Shakespearean Tragedy (1955) p. 94.

かも知れない。しかし問題は、この場合如何なる意味を附与したかと言うことであり、心理的解釈を施すことも可能であろう。思うに Cordelia の 'bond' は、それが frank な心に与える否定し得ぬ冷たさ、natural なものより義務観念の強いニュアンスを帯びた 'bond' —— あえて求めれば Portia の 'within the bond of marriage' (*Julius Caesar*, II. 1. 280) と、Coriolanus の 'all bond and privilege of nature' (*Coriolanus*, V. 3, 25) の双方の間を微妙に動揺するものであろう。Cordelia は姉達の齒の浮くような甘言を耳にしなかったならば、おそらく 'bond' という語を口にしたとしても、より以上に Lear を刺戟する言葉は慎んだであろう。その仮定が成立すれば、彼女は同じ 'bond' の中に、Coriolanus あるいは Le Beau の 'bond' —— the natural bond of sisters (*As You Like It* I. 2. 288) —— すなわち natural tie の意味を与えたであろう。だが姉達への反感は彼女の態度を硬化させその 'bond' は後に続く言葉からも想像できるように、明らかに Lear の求める 'nature' とは全く異なる意識され反省された、あるいは完全に自覚された義務観念としての意味を帯びて来ているのだ。後でとりあげるが Edmund のいう 'nature' が Lear のそれと同じ意味を持ちながら、語り手の心理を考慮する時違ったニュアンスを帯びて来るように、この 'bond' の中にもそうした陰影を認めることも許されよう。一方そうした倫理的色彩を帯びた娘の言葉が大きな衝撃を与えた Lear の 'nature' は一体どんなものであろうか。それは、natural feeling or affection (N. E. D.) であり、native sensation, innate and involuntary affection of the heart and mind (Schmidt: *Shakespeare Lexicon*) である。ねむっている父ヘンリー四世を前にしていう Prince Hal のせりふはもっとも明確にこの 'nature' の意味を伝えている。

Thy due from me
Is tears and heavy sorrows of blood,
Which nature, love, and filial tenderness,
Shall, O dear father, pay thee plenteously:
(2 *Henry IV*, iv. 5. 37-)

Hal のせりふにみられる 'blood' が 'nature' と同じように親子の自然な情愛を意味することに注目したい。もちろん 'blood' という語は本来何の価値の観念を含まない biological term にすぎないのであり、また一方、その微妙な意味の内包 (connotation) の中に潜在する倫理性をも見逃すことは出来ない。だがその倫理性をあらわに表にださない 'blood' という語と同じ次元において 'nature' をみなければならぬ。つまり Lear の 'nature' と Cordelia の 'bond'

の象徴するものは、無意識的あるいは潜在的倫理性と意識的反省的批判的倫理の対立、衝突と言えるであろう。そして Lear のただ無条件に情にのみ頼ろうとする態度と娘の自覚は次の二行に暗示されている。

So young, and so tender ?

So young, my Lord, and true.

(I. 1. 106-)

ともかく、Lear のうけた衝撃はたとえ彼の浅さはかさを云々するとしても、彼自身の存在そのものを揺るうごかす程のものであったといわねばならない。

Which, like an engine, wrench'd my frame of nature
From the fix'd place,

(I. 4. 277)

4.

'bond' との対立において Lear の 'nature' の意味を考察した。次に、同じく filial affection を意味しながら、明らかに意識的な倫理の意味を帯びている場合をとりあげよう。兄 Edgar を奸計をもって放逐し、今また、Lear に加担しようとする父 Gloucester をも、Cornwall に裏切ろうと目論む Edmund のせりふである——

How, my lord, I may be censured, that *nature* thus gives way to *loyalty*,
something fears me to think of.

(III. 5. 2-)

I will persevere in my course of *loyalty*, though the conflict be sore
between that and my *blood*.

(III. 5. 21-)

ここにみられる 'nature' と 'blood' は Prince Hal のそれと同様 filial affection である。その点で Lear の 'nature' と同じであるが、Lear との違いはそれが意識されている点である。'loyalty' という規範との何れ劣らぬ倫理的制肘のシレンマにおちいっていると装うのであるが、'loyalty' と同列に置かれていること自体が、'nature' がすでに倫理的次元において道徳的意味 (moral implication) を帯びていることを証明する。しかしこのせりふは、もちろん irony, 二重の意味でアイロニカルである。今 Edmund の口にする 'nature' は彼が否定しようとする当のものであり、さらに彼が葬ろうとする Gloucester の彼によせる信頼の故にである。今問題にしている場面 (三幕五場) の前と直後において彼に呼びかける Gloucester の言葉を想起しよう。Edgar の 'unnatural purpose' (II. 1. 52) をざん言した彼への父の言葉——'Loyal and natural boy' (II. 1. 84) を Edmund は今意識しているに違いない。またやがて両眼をえぐ

り取られた Gloucester は、再び 'nature' の名にかけて復讐を求めるのである

Edmund, enkindle all the sparks of nature
To quit this horrid act.

(III. 7. 85-)

これは同じく 'nature' に訴えて復讐を求める Ghost の Hamlet への言葉

If thou hast nature in thee, bear it not;

(Hamlet, I. 5. 81)

を想起させるが、当の Edmund の本体を知る 我々には父の痛切な叫びも妙に空しく響いて来る。こうした パースペクティブな視点からみる時、今 Edmund が口にする 'nature' はその特殊性を一層鮮明にし、むしろ不気味な印象をすら与える。かつて自分に与えられた賞讃の言葉を巧みに利用し、またやがて自分に呼びかけてくる父の痛切な訴えをも、まるで予想しているかのごとく逆用する Edmund の、Iago に劣らぬ偽善家振りと、それにも増して作者が 'nature' に持たせている微妙な意味の陰影と巧みな使いわけにつきぬ妙味を覚えるのである。

Edmund が信奉する Nature は野性的な本能的な生命力である。日蔭者 bastard として、しかも豊かな知力に恵まれた彼が、自分を outlaw とする既成秩序を破壊しようとするのは不自然ではない。彼にとって秩序は 'the plague of custom', 'the curiosity of nations' (I. 2. 3) にすぎず、合法的な子は 'a dull, stale, tired bed', において, 'tween asleep and wake' (I. 2. 15) の状態で生れた人間であるに対し、彼自身は, 'Who in the lusty stealth of nature take More composition and fierce quality' (I. 2. 11-) と誇らしげに考える。彼の 'nature' は動物的な sexual vigour でさえある。さて Edmund が現存する秩序を否定しようとすることは、彼がその秩序の存在を一応認めていることを前提とし、また彼が bastard であることは彼をして秩序破壊へと走らせる十分な理由を提供する。その点で Lear といちじるしい相違を認めねばならない。Cordeia の自覚と対立した Lear は、ここで再び Edmund の自覚と好対象をなしている。Lear の心情は未だ目覚めぬ未分化の状態にあり、Edmund はすべてを計算の上に立って実行する。

Let me, if not by birth, have lands by wit:

(I. 3. 190)

Edmund の Cornwall に語る 'nature' が皮肉な意味において moral implication

をもつ語であることはすでにのべた。その irony である所以のより重要な根拠は、それが彼の信ずる Nature とはおよそ正反対なものである点にある。私はここで *King Lear* を貫く 'old' と 'young' の対立を取りあげて Edmund の態度を考察し、Lear の Nature 観と比較したいと思う。Edgar を兄と認めねばならないのは

For that I am some twelve or fourteen moonshines
Lag of a brother ?

(I. 2. 5-)

かと彼は反問する。あるいは Edgar をおとしいれる 偽手紙の中で老人が権力をもっている限り若者の生きる瀬はないという――

This policy and reverence of age makes the world bitter to the best of our
times ; keeps our fortunes from us till our oldness cannot relish them.

(I. 2. 47-)

つまり彼の論理は、彼自身の言葉に従えば、'The younger rises when the old doth fall'. (III. 3. 27) という至極明快な言葉につきるのである。何事であれすべて割りきって考え、何の疑点をも残さない明快な論理は彼の思考と行動の特色となっていて、Lear の暗示的な微妙な思考と対照的である。この 'old' と 'young' の対立もこの悲劇そのものの筋、さらには Edmund の思想と呼応すると考えられる Goneril, Regan のせりふ (I. 1. 286-301, II. 4. 149-151), あるいは終末における Edgar のせりふ

The oldest hath borne most : we that are young
Shall never see much, nor live so long.

(V. 3. 324-)

を考慮にいれる時、重要な意味を帯びて来る。Edmund が 'young' の優越を勝ちとろうとすることは Lear の信じる素朴な自然観を根底から覆えすものである。Lear の 'nature' が何の疑いもなく自然であるとする 'old' と 'young' の位置を、Edmund, Goneril, Regan は全く正反対の方向に変えようとする。極言すれば、水は低きに流れるという意味でしか 'nature' を解しなかった Lear が、その自然の流れを逆に流れさせようとする一つの力にぶつかるわけである。それに対し Lear は抵抗を感じ、その抵抗によって彼の意識は目覚める。そしてその覚醒は Lear の、倫理的意味の世界への第一歩となる。Edmund, Goneril らの悪の力は単に Lear の精神に対して破壊作用を及ぼすだけでなく、以上のような分解と新生への緒を与えている。彼のかかる覚醒を導いた抵抗は

いうまでもなく Goneril, Regan の意識的忘恩であった。Edmund の Lear に対する抵抗は未だこの段階においてはあらわれて来ないが、彼と Goneril, Regan との悪の親和力は、やがて露骨な相を呈する sexual な牽引力によって次第にあらわとなって来る。

5.

Cordelia に対する怒りには 'ingratitude' という語は見当らない。'Nature' (I. 1. 212) という極めて暗示的な非分析的な語によって語られている。それはまた 'blood' (I. 1. 114), 'heart' (I. 1. 115) といった類の語で表現されているが、それらはすべて Lear の用語の特色であり、また彼の心情そのものを暗示している。彼はこの段階においては、抽象的倫理観念を示す言葉を用いず、もっぱら具象的なそれも biological term を使用するが、そのことは彼が 'nature' という語に持たせている素朴な人間観と相通ずるものがある。しかしやがて彼にも変貌が訪れる。Goneril への怒りの中に忘恩という言葉があらわれるのだ。

Ingratitude, thou marble-hearted fiend,

(I. 4. 267)

さらに Goneril に迫われた Lear の Regan に対するせりふにはいちじるしい変容がうかがえる。

thou better know'st

The offices of nature, bond of childhood,

The effects of courtesy, dues of gratitude;

Thy half o'th' kingdom hast thou not forgot,

Wherein I thee endow'd.

(II. 4. 179—)

ここに認められるのは、Lear が無意識に抱いた信条の分解である。かつては 'nature' という分析を許さない一語によって把握されていた親子関係がここでは極めて分析的となって語られている。王国を分ち与えた恩返しとして孝養を求める姿は、開幕冒頭の威光にあふれた、自らの怒りを dragon の怒りになぞらえた Lear を知る我々には卑屈にすぎる感を与える。また娘の孝養を 'offices of nature', 'bond of childhood', 'effects of courtesy', 'dues of gratitude' という風に論し訴える様は、まるで自らにむかってかつての 'nature' という一語を丹念に分析し言いきかせているかの感すら与えるのだ。Lear のこうした明晰な論理的な表現様式は、悲劇全篇を通してこの場面のみであり、それ以前にお

ける無意識の心情と、やがて彼を襲う狂気との間にはさまれた一瞬の心の状態を物語っている。また Cordelia への怒りを招いた 'bond' を今ここで他の娘に説いているのも皮肉であるが、こうした irony が彼の精神の展開の一つの型となっている。

Lear の変貌は Regan を前にして突然起ったものではない。すでに Goneril の邸でその絶対性の崩壊の前兆をみる。Goneril とその家来達の態度の中に、'a most faint neglect' (I. 4. 71) を感じとっていた Lear は Oswald にむかって皮肉な調子で問いかける――

O, you sir, you, come you hither, sir;
Who am I, sir?

(I. 4. 82-)

自らの地位を疑うことを知らなかった国王が、たとえ皮肉であれ、'Who am I?' と問うことは彼の世界の崩壊の前兆であり、自己の identity を見失う第一歩であろう。しかも Lear の心の不安と動揺をよそにして、彼を取りまく世界は非情である。Oswald は冷然と答える――

My Lady's father.

(I. 4. 84)

ここに Lear の置かれている立場は客観的に規定されたのだ。彼は王ではなく、一介の父にすぎない。皮肉にも Lear の、王から一人の人間への脱皮は、悪の一味 Oswald の言葉によって予告されたのである。我々は悲劇終末において、彼が王としてでなく一人の人間として救われたことを忘れてはならない。この意味において、彼と Oswald のわずか三行の問答は *King Lear* における重要な一つのモメントをなしている。

さて、Lear が国王であることはこの悲劇にとって絶対必須の条件である。'Who am I?' と問うことは、絶対者の問いとして始めて悲劇の意味をもって来るからであり、また国王という立場が必然的にもつ一種の無知と、一旦国王の座を追われた、あるいは自らその威信を否定した人間のもつ無力さと、さらに素裸の白紙状態こそ新たな経験を吸収するのにむしろふさわしいからである。

開幕冒頭の Lear は紛れもなく王である。一切の権力と威光を兼ね備えている。だが重要なことは外観的な問題ではなく、彼がただ命ずることのみを知る人間だという点である。彼の国王たるの意識は絶対、無条件である。彼の Kent への命令、また Cordelia への怒りの言葉は、自らを大自然、神々とすら一体

であるというおおらかな自負心をしめしている。

by the sacred radiance of the sun,
The mysteries of Hecate and the night:
By all the operation of the orbs

(I. 1. 109-)

このせりふのしめしている自負心は、Leech の言葉を借りれば正に 'cosmic self-importance'¹⁾ である。国王であり、父であることは、彼にとって当然すぎる程当然なことであり、彼のなし得ることは、臣下に対した娘に対し王であり父である自己をただ一方的に押しつけることである。「相互に理解し合おうとする意志」(mutual will to mutual understanding²⁾) が欠けているのは当然であり、一切の言動は殆んど無自覚な状態においてなされる。いわんや疑うというが如きは彼には想像も出来ないことであって、Goneril, Regan の愛のみせかけを、また Cordelia の冷たい言葉の奥にひそむ真実をも、ついに見抜くことは出来なかった。そこにただ愚かさをみるのは、先にのべたように悲劇に対する正しい態度ではない。以上強調した Lear の王たるの所以こそ、一旦破綻をみせれば、止るところを知らず悲劇の深淵に自らをつき落とす原動力と素質を内在するものである。くりかえすが、王国分割と Cordelia, Kent の追放をもって秩序の破壊とみなし、それに続く内乱と Lear の苦悶は、当然の神の報いであるとする Danby, Heilman の見解はあまりにも概念的抽象的にすぎて、Lear の悲劇の内的必然性を軽視するものである。

さて、Lear のかかる絶対性の崩壊の兆しをすでに Oswald との問答にみた。その一層明確な姿は、Fool の 'Lear's shadow' をさそう彼のせりふの中に認められよう。

Does any here know me? This is not Lear:
Does Lear walk thus? speak thus? Where are his eyes?
Either his notion weakens, his discernings
Are lethargied — Ha! waking? 'tis not so.
Who is it that can tell me who I am?

Lear's shadow.

(I. 4. 234-)

ぶつかり合う二つの力の動揺と擾乱を見事に伝えている。王の威容とまさに崩壊しようとする世界との相反する二つの力が衝突し渦巻くイメージであ

1) *Shakespeare's Tragedies* (1950) p. 79.

2) W. H. Clemen: *The Development of Shakespeare's Imagery* (1953), p. 134.

る。まさに見失おうとする自己の姿を、今一度確かめたいとする必死のものがきである。だが Fool の 'Lear's shadow' は先の Oswald の 'My Lady's father' (I. 4. 84) と同じように再び Lear の姿を端的に表現する。続く彼の言葉は突然散文となる——

I would learn that; for by the marks of sovereignty, knowledge, and reason,
I should be false persuaded I had daughters.

(I4. 240—)

「娘達があったはずだが……」といわしめる心の惑いは真実であり、理性と王のしるしに賭けるのも、逆説的に言えば、娘の姿を見失うことはとりも直さず王のしるしと理性を失うことであり、つまり自己の姿を見失うことである。そこにあるのは Lear ではなく、実に Lear の影にすぎない。Fool はなおも辛辣である——

Which they will make an obedient father.

(I. 4. 243)

obedient father —— Fool に言わしむれば、それは ass にすら明白な価値の顛倒である——

May not an ass know when a cart draws the horse?

(I. 4. 232)

Lear が 'nature' によって感じるものを Fool は常識によってえぐりだす。つねに倒錯された dry なそして明晰な image を Lear の前にむき出しにする。彼の任務は王を慰めることではなく狂気をつのらせることである。だが Fool にとって 価値の 顛倒として 理解されるものも、Lear には 'nature' にそむく 'unnatural' と映じる。Kent の 'unnatural and bemadding sorrow' (III. 1. 38) が象徴するように、'unnatural' との対決は必然的に狂気へと通じている。

I will forget my nature³⁾. So kind a father!

(I. 5. 33)

6.

狂気の Lear へと近づいた。だがその前に、彼のもう一つの Natura 観をとりあげて、狂気の場合のつなぎとしたい。

3) K. Muir は "forget my nature" を "cease to be a kind father" と解し, (op. cit., 57)

斎藤博士も nature を「親としての人情」と考えているが、むしろ "forget nature" は "lose control and go mad" に近い意味と私は考える。

we are not ourselves
When nature, being oppress'd, commands the mind
To suffer with the body.

(II. 4. 107-)

ここでは 'Nature' は人間の normal な状態を意味している。しかもそれは人間の 'mind' と 'body' の両方の健全な働きと協調を前提とするかのである。しかしながら人間の normal な状態はそれ自体決して善という概念で考えられるものではなく、あくまでもそれは人間の「常態」であって、abnormal な状態を予想する時始めて善という規範への傾向を示すものである。Lear にとっては、人間が健全であることこそ普通の姿、つまり常態なのであって、その姿が Nature 本来の姿、すなわち natural な姿である。親子の自然の情愛を何の倫理観念をも含まぬ 'nature' という語に表現した Lear の精神が、今また上記引用の 'Nature' の中にうかがえるのである。一方が人間の心をあらわし、他方が単に心だけでなく、肉体だけでもない両者融合の姿をしめす語であることにも、*King Lear* 中の 'nature' のもつ複雑微妙な意味の内包が窺われるのである。だが又反面、微妙な陰影にもかかわらず、Lear の 'nature' には上にのべたような共通する何ものかがあることを忘れてはならない。

さて上記の引用は、実は仮病をつかって Lear との会見を拒絶する Regan 夫妻にちっと我慢していうせりふである。後を追って来た Goneril は Regan と合体し、いよいよ Lear は虐待にたまりかねて嵐の荒野にさまよい出ることとなる。彼は天にむかって娘の忘恩をたたきつける。

Crack Nature's moulds, all germens spill at once
That make ingrateful man!

(III. 2. 8-)

忘恩の胚種が、Nature の中に潜んでいると考えるのは、Lear の自然観の大きな変化ではないであろうか。これまで口にして来た 'nature' は、単なる apostrophe は別として、人間の本来のあるいは自然な姿を意味していたが、今は激しい怒りと荒れ狂う大自然の猛威にかきたてられ、彼の想像力はすさまじく燃えあがったのである。かつては自己と一体とすら信じていた大自然を今は娘と協力する 'servile ministers' (III. 2. 21) とすら呼ぶ。だが激怒も和らぎ彼の眼が冷然と人間の醜惡に据えられる mock trial scene に注目しよう。

Then let them anatomize Regan, see what breeds about her heart. Is there
any cause in nature that make these hard hearts?

(III. 6. 77-)

これは不気味なイメージである。Regan を解剖し彼女の胸に忘恩の冷酷な心をつくる原因を探し出せと言うのだ。ここにみられる 'nature' は *King Lear* の中でもっとも深刻な意味をもつ 'nature' である。同じくこのせりふに含まれる 'heart' が、一方は「人体の胸」を、他方は「人間の心」をしめすと同じように、この 'nature' はその一語の中に、「肉体」と「心」を、さらにより根元的な「人間存在の法則」をすら暗示している。'heart' や 'anatomize' の伝える physical なものと、'hard hearts' の意味する spiritual なものとが、'nature' の一語を通じて交錯する。こうした具体から抽象への換喩 (metonymy) あるいは抽象から具体への意味の推移によって複雑なイメージを与えるこのせりふは、Lear の心中の複雑さを伝えるものである。それは素朴に信じて来た 'nature' への懐疑と不信の表明である。'make' という動詞が Subjunctive となっていることも話し手の心中を反映するものであろうか。この章冒頭に引用した 'Nature' は、'mind' と 'body' との調和ある状態を意味したのであったが、今や狂った Lear には、肉体と精神との矛盾が娘 Regan の冷酷な心を通して明白となって来たのだ。それは狂った Lear の心眼に映じた現実の姿であった。かくて彼の 'nature' が娘の忘恩を契機として次第に意味の内包を広め、ついに相容れない矛盾に達した過程は、同じく忘恩から発し、人間の一切の悪徳、性の醜くさの曝露へと拡大する過程と一致する。

その換喩的表現形式にしめされる Lear 独特の思考によって得られた 'nature' の矛盾は、しかしながら一幕二場においてすでに Gloucester の口から発せられている。

These late eclipses in the sun and moon portend no good to us : though the wisdom of nature can reason it thus and thus, yet nature finds itself scourg'd by the sequent effects.

(I. 2. 107-)

この後に友人肉親間の離反、国の乱れを嘆く言葉が続いている。始めの Nature は自然界を後の Nature は human nature あるいは humankind を意味するものである。自然 (物質) と人間とを等しく Nature の語で呼ぶことによって、かえってその両者の矛盾を言いあらわしたこのせりふは、おそらく *King Lear* を通してその背後に横たわっている解決され得ない問題を chorus 的に提言したものであろう。飛躍した言い方を許されるならば、それはおそらく Shakespeare その人の、また二つの新旧思想の渦巻くルネッサンス時代に生きた人々の深刻な悩みであり懐疑であったであろう。しかしそれはとも角として、劇の導入部を終えたところではやばやと、Gloucester をして言わしめてい

るこの問題に、主人公 Lear が如何にして、如何なる過程をへて達着するに到ったか——それが私の特に強調したい点である。

動物的生命力としての Edmund の Nature については、すでにあまりにも多く語られて来た。私は Regan の言葉をとりあげて考えてみたい。老い先短い父に対して、年寄りば年寄りらしくと責めるところである。

O, sir! You are old;
Nature in you stands on the very verge
Of her confine:

(II. 4. 147-)

ここにみられる Nature はいうまでもなく physical life である。このせりふが物語るように、それはいずれは消滅する有限の存在である。Regan にとって、有限の 'nature' が老い、そして死んで行くのは当然であり、Goneril にとっては、'old' に伴うものは 'indiscretion' と 'dotage' (II. 4. 198) にすぎない。4章でのべた 'old' と 'young' の対立はこの意味においても重要な主題となっている。さて、Regan のこの 'Nature' は父の死を悲しむ Hamlet をいましめる Gertrude のせりふを思いおこさせる——

Thou know'st 'its common; all that lives must die,
Passing through *nature* to eternity.

(Hamlet, I. 2. 72-)

Gertrude の 'nature' また「有限の生命」を意味し、人の死を 'common' というのだ。それは Gloucester の 'wisdom' をもって理解し納得できるたぐいの Nature であろう。だが Hamlet はそれで満足しえたであろうか。そしてまた Lear はそこに安住し得たであろうか。

7.

Nature とは一体何であるか。おそらくそれは Shakespeare の全作品を通じての根本的問題であろう。そしてまたおそらく彼自身解決を与えることなく、ただ問いの形として提示した問題であったであろう。King Lear の全作品中における位置から考えて、Shakespeare の問いと懷疑はそのまま Lear の問いと懷疑であろうと私は考えるのである。

この Nature の問題を Edmund 対 Lear の形でとりあげる通説に従い、特に Danby, Heilman の見解を紹介し、いささか私見をのべてみたい。Danby が Lear の Nature を秩序を意味する Benignant Nature と呼び、Edmund のそれ

を悪としての Malignant Nature と呼んでいることはすでにのべた。さらに Cordelia は、Lear が信じながらも明確に認識しえぬ Nature の完全な具現者であり、且つ natural theology の伝統的理想の体现者である¹⁾。だがその絶対の善 (unqualified goodness) も周囲が悪である時、ひとり存在を保つということは出来ないものであり、Lear と Cordelia は、人間界に彼らと共存する悪 (the evil co-present with them in the human universe) の犠牲者となる。個人の幸福あるいは善は、社会全体の善によってのみ存在しうるのである²⁾。つまり Cordelia は、Shakespeare にとっては Utopia への祈りであったのだ。これを裏返しすれば、根絶しがたい悪の存在を認めたものといえるであろう。これに対し同じく *King Lear* の中に強いキリスト教的信条をみる Heilman は、Edmund の最後の言葉 —— “The wheel is come full circle; I am here.” (V. 3. 174) 及び “some good I mean to do/Despite of my own nature.” (V. 3. 243-) をとりあげて、Edmund の Nature の自滅を説き Lear の Nature の勝利を強調する。(Lear's Nature conquers Edmund's Nature)³⁾。

Danby にしても Heilman にしても、善と悪とをそれぞれ代表する相対立する二つの Nature をみとめているのであるが、少くとも Lear の意味する ‘nature’ はそうした善と悪との区別を絶した何ものかではなかろうか。始めから、善という Nature と悪という Nature が存在するのではなく、Nature そのものの中に、善と悪との可能性が内在するものではないか。Lear がその直接経験をへて達着した ‘nature’ の矛盾は、何よりもそれを物語るものであろう。6章冒頭でのべたように、心と肉体、精神と物質とをふくめて一切の事物、現象が健康であることが、Nature の「常態」であって、それは natural と呼ばれこそすれ、特に善という概念で呼ぶことは出来ないものであろう。意識と反省の次元に立ってみる時、あるいは unnatural の発生または存在を知る時始めて natural は善という観念と結びつくのである。しばしば強調したごとく、Lear の展開は無意識と無自覚から覚醒への過程において Nature と対決する姿であった。彼が親子の愛情を ‘nature’ と呼んだのは、それが何の倫理観念の援けを借りずとも人間の本能としてごく自然に存在しうる感情であるからだ。だがその同じ本能は Edmund, Goneril らにあっては悪として働くのである。しかしながらその悪も、人間の本能であるかぎりにおいて人間の中に、従って Nature の中

1) Op. cit., p. 125.

2) Ibid., p. 189.

3) Op. cit., pp. 126-127.

に内在するものと言わねばならない。動物的生命力もたしかに Nature の一面であり、Edmund がそれを “Thou, Nature, art my goddess :” (I. 2. 1) と呼ぶのは決して詭弁ではない。

Nature は単に Danby のいう Benignant Nature だけではなく、また単に Malignant Nature だけでもない。といってその二つが対立して存在するのではない。東洋流にいて、自然は「性善説」、「性悪説」のいずれをもっても解決出来ないものであって、むしろ Adam と Eve との追放前の Eden の園とでもいえようか⁴⁾。あるいは実在そのもの、生命そのものと言う方がよりの確であろう。しかしその Nature はいわば未だ無免疫の状態であり、つねに悪の力におびやかされる危険をはらむものである。Shakespeare の考える Nature は、特に悲劇期におけるそれは、そうした悪の力とつねに対峙しあっている相において考えらるべきものである。‘scourg’d’, ‘oppres’d’, ‘subdu’d’, ‘abus’d’ といった語としばしば結びついた ‘nature’ のイメージ、あるいは *King Lear* の中に頻出する disease のイメージはそうした侵されやすい Nature を物語っていると考えてよからう⁵⁾。しかも disease によって Nature が本来の姿を失った unnatural な状態も。Lear の言葉をもってすれば、外ならぬ「自分の肉体の病い」(a disease that’s in my flesh (II. 4. 224)) にすぎないのであり、また忘恩の娘も自分の肉体が産みだしたものに外ならない。それ故にその肉体を無慈悲な嵐にさらすのは当然の刑罰だと考えるのである。

Judicious punishment ! 'twas this *flesh* begot
Those pelican daughters.

(III. 4. 74-)

自らの肉体から産まれた悪に悩みながらも、無慈悲に肉体にうちつける雨風—— little mercy on their *flesh* ——をも正当なる刑罰と感じ、さらにその肉体にちかに感じる苦しみを通して始めて貧しい人々への共感に到達するのである。

O ! I have ta'en
Too little care of this. Take physic, Pomp :

4) Thou hast one daughter, / who redeems nature from the general curse / which twain have brought her to. (IV. 6. 206-) の ‘twain’ は、Goneril, Regan をさしているが、Adam と Eve をも連想させる。(Cf. Heilman : op. cit., p. 125, Muir : op. cit., p. 183)

5) 「肉体の健康」また「病い」という生理上の用語をもって Nature を考える Lear の態度は、単にそれが人間の心理、精神を暗示するという比喩的意味以上のものである。そうした表現形式は、Nature また人間の生命に対する彼の根本的な態度をしめしている。

Expose thyself to *feel* what wretches *feel*,
(III. 4. 32-)

この共感に到達する道程、および裸体の Tom の姿に一切の飾りをぬぎすてたリアルな人間——unaccommodated man (III. 4. 109)——あるいは 'the thing itself' (III. 4. 109) をみるに到る過程に、私は Lear に独得の真実探求の方法を認めたいのだ。そしてこの間にくりかえし口にする 'flesh', 'feel', 'bare' 'uncover'd' は Lear の認識の方法を暗示するものである。抽象的思考を避けてつねに肉体あるいはそれと密接に関係する語をもって彼は思考する。先にのべた具体から抽象への換喩法的表現はこの思考形式の特色である。私は先に、Nature は作者の従って Lear の cogito ergo sum であるといったが、Nature が認識の出発点であるとすれば 'flesh' は認識の媒体であるといい得る。そして Nature に出発し肉体を媒体とする認識方法こそ、伝統思想を排除し既成思想の援けを借りずに真実を求めようとする Shakespeare の態度にもっとも適切な方法であろう。King Lear の source の一つである *The True Chronicle History of King Leir* がキリスト教世界であるに対し、この作品が pagan の世界であるのも作者のそうした意図を物語っている。

だが問題は一向に解決しないのだ。既成思想を排除しての真実追求の出発点において、絶対者として設定された Nature も、Lear の直接経験のはてについてそれ自身内在せしめる矛盾を曝露するに到るからである。実に Nature の問題は、Shakespeare 自身未解決のまま、ただ問いという形として提出したのだと考える所以である。おそらく Cordelia の存在理由はここに到って始めて意義をもつものではないであろうか。未解決の問題に悩む Lear を救いうる唯一の可能性——私はそのように考えている。Lear が Nature の矛盾に逢着するまでの過程をもし認識論と仮に呼ぶとすれば、Cordelia との再会合一は宗教哲学と呼ぶであろう。だが Cordelia による救いも、作品自体がしめすようにあくまでも可能性の域をでないものである。一方、Kent, Albany の代表する善と正義、あるいは神への讃美は、Lear の精神の展開にとって何の貢献をもなしていないことは注目に値する。彼らの思想、信念をもって、King

6) Cf. E. Dowden: *Shakespeare, His Mind and Art* (1892), p. 269.

K. Muir: op. cit., Introduction, Ivi.

King Lear にでて来る神はすべて異教的 gods である点は *Hamlet*, *Macbeth* と対照的である。しかし Lear の "As if we are Gods' spies" (V. 3. 17) を "God's spies" とみて、そこに Lear の唯一神教的宗教への到達を考えたのは Wilson Knight であった。*(The Wheel of Fire (Meridian Books) pp. 190-191)*

なお、Dowden, Bradley, Danby, Heilman, Spencer も God's spies と読んでいる。

Lear の中心思想とみるのは甚だしい誤謬である。*Hamlet* の “If it be not now, yet it will come: the readiness is all” (*Hamlet*, V. 2. 234) と比較される *Edgar* の父をいましめる言葉——“Ripeness is all.” (V. 2. 11) は *Lear* が到達した心境をも伝えているが、むしろそれは中心思想に対する chorus と考える方が正しいであろう。*Lear* 自身の口からは殆んど神への讃美の言葉はきかれず、苦難の中にあつて彼が求めそして得た最大の教訓はただ忍耐のみであつた。

Thou must be patient; we came crying here:
Thou know'st the first time that we smell the air
We wawl and cry.

(IV. 6. 180—)

時に人間の醜惡さにたたきつける 激烈な呪い (IV. 6. 110—) もあるが、彼が最後が到達した心境は、むしろ素朴な単純な言葉でつぶやかれる自らへの反省である——

when the sunder would not peace at my bidding, there I found 'em, there
I smelt 'em out. Go to, they are not men o' their words: they told me I
was everything: 'tis a lie, I am not argue-proof.

(IV. 6. 103—)

‘the great image of Authority’ (IV. 6. 160) をぬぐい去った、いわばはだかの *Lear* の姿を我々はここにみるのだ。そしてこの劇冒頭の彼みずからの次の言葉を思いおこさずにはおれないのである。

we
Unburthen'd crawl toward death.

(I. 1. 40—)